

川上宏奨学金受給研究成果報告書

研究題目: 不登校を契機とした日常生活の再構成 ―母親の育児経験に着目して―

1. 研究背景と目的

子どもが病気などを除いた何らかの原因で学校を30日以上欠席する不登校現象は、両親にも学校に行かせるという育児の役割を達成できていないという不安と葛藤を与える。本研究は、子どもが不登校になったときに母親が抱える不安と、自身の育児役割について見直す過程でどのようなことが助けになったかを明らかにすることを目的とした。

2. 研究方法

調査方法として過去の新聞記事と先行文献を用いた分析と、両親が不登校による孤立を防ぐ目的で親の会が定期的に開催する「お話会」の参与観察、不登校児童生徒の母親8名に育児経験についてインタビュー調査を行った。

3. 研究結果・考察

新聞記事と先行文献を用いた分析では、不登校が問題化した当初は登校復帰を目標とした視点の言説が一般的であったが、不登校児童の両親の社会運動を起点に、親や子どもの当事者を含めた視点に転換した。このことから、両親に焦点を当てた質的調査の必要性が明らかになった。

「お話会」での参与観察では、親の会では子どもの将来の理想像に自立した大人になることを共有していること、不登校の親が孤立を防ぐために共感を用いていることが明らかになった。

インタビュー調査では、発達障害を抱えた子どもの場合は、発達障害への予見と知識が助けになった事例が明らかになった。ほかにも、学校長といった学校側の人物からの理解や、子どもが不登校になる以前から、不登校の事情に詳しい保護者との友人関係が助けになったことが分かった。一方で、不登校の支援策が同じ自治体の中でも格差が生じていたり、子どもが家で生活していることによって仕事を辞めざるを得なかったりと負担を抱えていることも明らかになった。

4. 謝辞

本研究をおこなうにあたり、奨学金を給付してくださった故川上宏先生とご家族、関係者の皆様に心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。